

「春陽会アーカイブ 武田百合子氏、山中真寿子氏インタビュー」(2017年11月24日)から

武田 昭和三十二(一九五七)年九月十七日、朝日新聞にこういう記事(長谷川路可「イタリアでの制作生活」)が載った。イタリアでの制作。(記事を持参)(全文収録)

それを読んでフレスコ画を習いたいと思っていたところ、その後武蔵野美術学校に入学したら、偶然デザイン科の先生として長谷川路可が来た。日本でもフレスコ画の仕事をしたいが助手が必要なのでフレスコを習いたい人を募集した。三十人ほど集まったが、残ったのは春陽に出品した十名だけ。教える場所は階段の壁面。時々見に来る。路可の仕事をあちこちで手伝った。

(略)

武田 一九六二年が初出品。一九六三年、第四十回記念大賞をフレスコの十一人のグループ(武田百合子、玉置高明、古川清右など)で受賞。春陽展と女流画家協会展に出品。女流画家協会展はその一回しか出していないが桜井悦賞を受賞した。

イタリアでの制作生活 壁に向って六年間



制作中の長谷川路可

長谷川 路可

(一八九七年七月九日―一九六七年六月三十日)

東京に生れる。一九一四年第一回再興日本美術院展に水彩画を出品。一六年東京美術学校日本画科に入学、松岡映丘に師事。二年パリ、ヨーロッパに遊学。アンデパンダン展、サロン・ドートンヌに作品を発表。二四年松本亦太郎(東京帝大教授)、結城素明(東京美術学校教授)などから西域壁画の模写を依頼され

る。二六年西域壁画模写が評価されてサロン・ドートンヌ会員に推挙される。三〇年ローマで開催された日本美術展覧会に横山大観、松岡映丘、平福百穂らの随員として派遣される。三一年早稲田大学理工学部建築学科研究室の壁にフレスコ画《アフロディーテ》を描く。文化服装学院、日本大学専門部芸術科、東京家政専門学校、恵泉女学園高等部に出講する。四九年鹿児島カテドラル・ザビエル記念聖堂のために《聖ザビエル日本布教図》などを制作する。五一年イタリアのチビタベッキアのフランシスコ会修道院に壁画《日本聖殉教者教会》の制作に取り掛かる。五四年壁画完成、チビタベッキア市の名誉市民に列せられる。五七年《日本聖殉教者教会》壁画制作を終え帰国。五八年武蔵野美術学校デザイン科講師として出講。六〇年第二十回国民歌劇協会公演オペラ「細川ガラシャ」の美術を担当、第八回菊池寛賞を受賞。武蔵野美術学校の教え子を率いて「F・U・L・スコ・M（モサイク）壁画集団」を結成。六一年ブリヂストン美術館で個展開催。六六年日本二十六聖人記念館（長崎）に《長崎への道》（フレスコ画）を制作。六七年教皇パウルス六世の招聘で渡伊、七月三日脳溢血にてローマで死去。

イタリアのチビタベッキアはカルタゴの攻略にローマ艦隊が船をそろえて出港した歴史を持ち、詩人スタンダールが華やかなる文筆生活を送った土地である。私は六年間、この地のフランシスコ修道院のパーデル達と起居を共にして、日本二十六聖人の壁画をはじめ六個の祭壇壁画と天井画を完成して帰って来た。高さ五メートルの画面をつなぎ合わせると四十二メートルに及ぶものとなった。

修道院はいうまでもなく女人禁制で、厳しい戒律を守り、清貧に甘んじているのだから、彼らとともにこの生活に慣れるのはなかなかの苦勞であった。朝は未明の鐘とともに起き、スパゲッティの繰り返される貧しい食卓に、長い祈りの後のイタリア語の講話に耐え、心おきなく語り合う友人もないただひとりの日本人として、この長い期間を身にしみて異郷にある思いをした。しかし、サルジニア島への連絡船が出るので、すべての急行が停車し、おかげでたびたびローマに出ることができた。

はじめの六カ月で下絵を完成して修道院当局に示し、本画にかかったのは昭和二十六年八月であった。高い足場を組み、左官の仕事からすべてひとりで行った。言葉の不便もさることながら、フレスコによる壁画制作は、壁のなまがわきのうちに執筆、予定の個所まで仕上げ、つぎつぎと連続作画してゆかねばならぬので、きままに仕事しなかったために、助手は最後まで使わなかった。

フレスコ壁画をやるには、壁に用いられる石灰が重要な要素となるので、これは二、三年も水につけて

壁に向って六年間」
あるものでなくてはならず、新興建築が矢つぎ早やに建ってゆく時節柄、これを探し出すのに非常な苦心をした。さいわい五年前のものを発見して、具合のよい石灰を使用した。絵具はもちろん最良のものを使ったが、コバルトとテルベツト（草色）はフランスに注文したほどである。
大体、フレスコによる壁画は、しめっている生地に水彩するのであるから、徐々に壁の乾くとともに色調は変化し、一週間くらいでほぼ調子をととのえることができる。まったく乾き上げるまでにはおよそひと月くらい待たねばならず、効果はその後に見るような始末である。だから、この技法には、大変ゆたかな経験と熟練が必要だ。

チビタベツキアの二十六聖人聖人壁画は、長崎の立山^{たてやま}での殉教の図であるが、まったく血なまぐさい情景は避けてしまった。それは日本人の感情として、はりつけにされた聖人たちが「にっこり笑って死地につく」気持を表わしたかったのである。それで画面は淡く明るい色調に仕上げた。これはいままでのイタリア的画風の強烈な色感と写実的な処刑の場面とくらべて、大いに個性的、あるいは民族的画面に見えたのである。イタリアの専門家はこの点を認めてくれたようであった。技術はまったくイタリアに伝えられているものを用いても、おのずから日本的な画面になったのはうれいことと思っている。ピエル・デラ・フランチェスカの画風にあこがれていたことが、なんとなくながえららしく、それを指摘されたこ

とはほほえましいことだった。

壁に向って六年間」
しかし、壁画は執筆された場所においてのみ見るのが通例だったが、古代壁画がその建築のゆるみとともにこわれてゆくのを完全に保存するため、あるいは壁画自体を任意の所に持運ぶ手段として、近年ストラッポという壁画をはぎ取る方法がイタリアでは熱心に研究されていた。これを知ることがは新しい技法を壁画法とともに日本の画壇に示すことになるので、とうとう今日までがんばりつづけてこの珍しい技術も自分のものとして帰って来たのである。

日本にはイタリアのように古代壁画はないが、東洋各地の古墳壁画を一日も早くはぎ取って、美術館に保存するならば、どれほど安全であるかわからないと思う。例えば二千年前描かれたエトルスの古墳壁画をタルキニアの美術館に陳列しているように……。

(画家)